



TITLE:

汪古部の一解釋

AUTHOR(S):

小野川, 秀美

---

CITATION:

小野川, 秀美. 汪古部の一解釋. 東洋史研究 1937, 2(4): 303-331

ISSUE DATE:

1937-04-28

URL:

<https://doi.org/10.14989/138751>

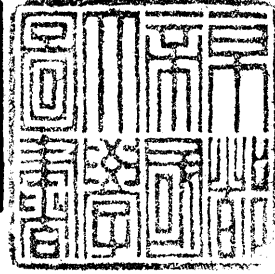
RIGHT:

「汪古部の一解釋」(前號一)正誤  
(元頁所載)

頁	行	誤	正
六十一		existet	existed
六十三		Mungul	Mungul
六十四		Mungul	Mungul
六十二		一部派	一部族
三、十六		韃韃	韃韃
二五、二		卷二五	卷一五
一六一		平穩である	平穩であるか
一七、五		僕固懷恩	僕固懷恩
二、八・九		鉄勒傳	鉄勒傳
三、一		且防	邊防
三、註8		四子部落傳	四子部落條
三、註13		P. 48. n. l.	P. 84. n. l.
同		田中博士が契丹と譯されてゐるのは妥當でなく、	之は筆者の誤解に就き謹んで訂正す。博士の譯文には、契丹(金)とある。
二七、註20		Inschijt.	Inschijt.
同		sakiz oruz	sakiz oyuz
二六、註25		振武軍	寇振武軍

612686

12. 9. 30



303

# 東洋史研究

第二卷  
第四號

昭和十二年四月發行

## 汪古部の一解釋

序

小野川 秀美

汪古部の種族に關する基礎的史料としては、元史(卷一)阿剌兀思剌吉忽里傳にその來歴を記して「汪古部人、系出沙陀鴈門之後」とあり、同書(卷一)太祖紀に「白達達部主阿剌兀思」の文字が見える。此の兩個の記事が殆ど唯一の史料であつて、汪古部・沙陀鴈門・白達達三者の關係の解し方に從つて説を異にし、既に種々の見解が發表されてゐる。汪古部が考察の對象に置かれたのは主として韃靼との關係に於てである。箭内博士は白達達を汪古部の漢名と見、沙陀鴈門に重きを置いて、土耳其系統であると説かれる。(1)若し此の見解にして成立するならば、韃靼に蒙古・土耳其古兩系統が存すると云ふ結論を導き、王國維氏の所謂二元論が可能と爲つて來る。蒙古系統の韃靼とは突厥碑文所見の三十姓韃靼(Oghuz Tatars)、契丹國志(卷二)「四至隣國地理遠近」の條に出づる達打、成吉思汗時代の塔塔兒の謂にして、既に箭内博士の指摘せられた所である。白鳥博士及び王國維氏は、その見解に多少の相違があるにしても、白達達を以て蒙古系統の韃靼に該當せしめ、沙陀鴈門を附會と論ぜられる。且つ王延德

の高昌行紀によれば、宋初河西に九族達祖の存在を認められ、之をも蒙古系統と説く。その爲に蒙古系統の韃靼の大が、りな西方移動が推定され、汪古部は白達達の實稱或は名族と解釋されるのである。<sup>(3)</sup>此の外に異説を擧げるならば、古く Howorth 氏は汪古部を以て土耳其王朝によつて支配される滿洲系統の韃靼の殖民地であると云ふ折衷説を採用し、<sup>(4)</sup>近く櫻井氏は、汪古部に於ける基督教を考察する前提として、前記の史料と別個の一史料とから、土耳其系統の回鶻部族に屬し、それが白達達の如き誤り易き名稱を漢人から附せられたのは、韃靼族と混同し誤認したのによると云ふ説を立てられた。<sup>(5)</sup>別個の一史料とは元好問遺山集<sup>(卷二七)</sup>恒州刺史馬君神道碑に、その子孫が汪古部に屬する馬慶祥の先世の來歴を述べて、

出于花門貴種、宣政之季與種人居臨洮之狄道、蓋已莫知所從來矣、金兵略地陝右、盡遷遼東、因家焉、太宗嘗出獵、恍惚間見金人挾日而行、心悸不定、莫敢仰視、因罷獵、勅以所見者物色訪求、或言、上所見殆佛陀出現、而遼東無塔廟尊像、不可得、唯回鶻人梵唄之所有之、因取畫像進之、

と云ふ記事である。此の史料は既に錢大昕氏によつて十駕齋養新錄<sup>(卷九)</sup>雍古の條に載録され、「然則雍古部殆回鶻之別支乎」と説いてゐる。柯紹忞氏もまた「雍古氏回鶻之貴族也」と斷定してをられる。<sup>(6)</sup>勿論諸名家によつて唱へられた見解にはそれぐに相當の論據がある。然しながら解き難い事項はなほ殘されてをり、こゝに於ては汪古部・白達達は羌族を以て構成され、沙陁鴈門を傳説と見て、韃靼に蒙古・羌兩系統があると云ふ見解を述べる。

元史列傳に載録されてゐる汪古部所屬の人々は阿剌兀思剔吉忽里<sup>(卷一、一八)</sup>、按竺邇<sup>(卷二、二二)</sup>、月乃合<sup>(卷一、二四)</sup>、馬祖常<sup>(卷一、四三)</sup>、汪世顯<sup>(卷一、五五)</sup>、趙世延<sup>(卷一、八〇)</sup>及びその系統である。按竺邇は趙世延の祖に當り、月乃合は馬祖常の曾祖に

當るも、別に傳を設けられ、月乃合の父・馬祖常の高祖馬慶祥に就いては金史<sup>(卷二四)</sup>に傳がある。阿剌兀思剌吉忽里は略・豐州の地域に住し、按察通・趙世延の先は雲中の塞上或は北邊に居る。馬慶祥の先世は西域より入りて臨洮の狄道に居り、後淨州の天山に徙つた。<sup>(8)</sup>馬君神道碑によれば、先世は種人と臨洮の狄道に居り、後金兵に略せられて遼東に遷り、父把驤馬也里黠の時靜州の天山に遷つたと云ふ。靜州は淨州の別名のやうである。また汪世顯は鞏昌鹽州の人とある。鹽州は新元史<sup>(卷四二)</sup>汪世顯傳に従つて鹽川と訂正さるべく、元史<sup>(卷六〇)</sup>地理志鞏昌府の條に

郭縣下宋名鹽川寨金爲鎮至元十七年置今縣

と云ふ鹽川に該當するであらう。之を要約するならば、汪古部所屬の人々は河套の東北邊黑水の流域から大同の北邊に亘る地域に居處を示され、唯汪世顯のみが河套の西南邊鞏昌府に居住してゐたことゝ爲る。然しながら之は馬慶祥の先世が嘗つて臨洮の狄道に居たことを考慮するならば、別に異とするに足らず、却つてその種族を示唆する如くである。白達達部主阿剌兀思剌吉忽里は元史<sup>(卷一八)</sup>の傳に「遠祖十國、世爲部長」と見え、世・部長の家柄であつて、遼末の白達達詳穩牀古兒もまたその系統であると思はれる<sup>(遼史卷三〇天祚皇帝紀)</sup>。

こゝにその種族を推定せしめる記事を認められるのは、馬慶祥・月乃合・馬祖常の如き馬氏の系統及び阿剌兀思剌吉忽里である。馬君神道碑に馬氏の先世を記して、「出于花門貴種、宣政之季與種人居臨洮之狄道、蓋已莫知所從來矣」と見え、黃潛金華黃先生文集<sup>(卷四三)</sup>馬氏世譜には

馬氏之先出西域聶思脫里貴族、始來中國者和祿采思、

とある。陳垣氏の解釋によれば、同語は唐より以來摩尼を崇奉してゐたので、元好問は聶思脫里(Nestor)を誤つて

摩尼と爲し、花門貴種即ち回鶻と爲したと云ふ。<sup>(10)</sup>元來馬氏の先世に就いては不確かな事が多くある。遼東に遷つた事實、淨州の天山に遷つた時期、及び馬姓を稱するに至つた時期に疑點の存するのは別としても、<sup>(11)</sup>天山は金史<sup>(二)</sup>

四) 地理志西京路の條に

淨州下刺史、大定十八年、以天山縣升爲豐州支郡、……縣一天山

舊爲樅場大定十八年置爲倚郭

とあり、元史<sup>(卷五八)</sup>地理志にも「淨州路下領縣一天山下」と見えて、淨州・淨州路の屬縣であるに拘はらず、馬祖常撰禮部尙書馬公神道碑には、

公諱月合乃、世屬雍古部、族居靜州之天山、天山古居延海也、

と天山を以つて古居延海に比定してゐる<sup>(元文類卷六七)</sup>。記事の曖昧さが窺はれるのである。また馬氏の先世は馬慶祥

から三世・馬祖常から七世を辿り得るのみにして、臨洮に居住する以前の狀態は不明である。恐らく馬君神道碑に「蓋已莫知所從來矣」と云ふのが實狀であつたと思ふ。陳垣氏引用する所の馬祖常石田集<sup>(卷一)</sup>飲酒詩に

昔我七世上、養馬洮河西、六世徙天山、日日聞鼓聲、金室狩河表、我祖先群黎、詩書百年澤、濡翼豈梁韜、嘗

觀漢建國、再世有日碑、後來興唐臣、胤裔多羌氏、春秋聖人法、諸侯亂冠弁、夷禮即夷之、毫髮各有稽、吾生

賴陶化、孔階力攀躋、敷文佐時運、爛爛應壁奎、

とあり、馬祖常は日碑・羌氏を以て自ら擬してゐる。此のことは、よし馬氏の先世が花門貴種或は聶思脫里貴族に由來するにしても、既に羌化されてゐたことを示唆するのである。「胤裔多羌氏」の字句はかく解しなければ説明が付かないと思ふ。後段に述べる如く、党項・吐蕃の混淆した羌族は河套の殆ど全般に亘つて蔓延してゐる。殊に臨洮・鞏昌一帯の地域に於ける羌族には、西夏と宋・西夏と金の兩勢力の間に介在して、活潑な活動が認

められる。馬氏の先世はその消息が曖昧であるに拘はらず、臨洮の狄道に來住して羌族に同化してゐたことを推定せしめるのである。鞏昌鹽川の人汪世顯もまたその居住地域から見るとすれば羌族に屬するやうである。元史

(卷一) 趙阿哥潘傳に

趙阿哥潘土播烏思藏掇族氏、始附宋賜姓趙氏、世居臨洮、祖巴命富甲諸羌、父阿哥昌貌甚偉有力兼人、金貞祐中、以軍功至熙河節度使、

と見える。臨洮の羌人趙阿哥昌が金の熙河節度使に任じたと同様に、鞏昌の汪世顯は金に仕へて鎮遠軍節度使・鞏昌便宜總帥に至つたのである(元史卷一五)。(五汪世顯傳)。

阿刺兀思剔吉忽里は元史(卷一)の傳に「金源氏塹山爲界以限南北、阿刺兀思剔吉忽里以一軍守其衝要」とある。此の記事が蒙韃備錄征伐の條に

至爲章宗立、明昌間不令殺戮、以是韃人稍稍還本國、添丁長育、章宗璟又以爲患、乃築新長城在靜州之北、以唐古弘人戍之、

と云ふに該當すべきことは、既に王國維氏によつて指摘されてゐる。(12) 阿刺兀思が党項に由來すべき唐古弘人に屬し、且つ阿刺兀思の系統を部長とする白達達が唐古弘人と密接な關係を持つことを推定せしめるのである。然らば馬氏・汪世顯・阿刺兀思剔吉忽里の所傳は相應じて、その屬する汪古部をば羌族或は羌化した異種族をも包轄する羌族を以て構成されてゐると見る見解が可能と爲つて來る。

なほ汪古部の稱呼に就いて考へるに、ドーンモン蒙古史の註には

契丹の帝王アルタン汗が蒙古部客刺亦都乃蠻部等の入寇を防ぐが爲に Tchourché 海(黃海)の海岸より Caru-

mouran (黄河)の河邊まで長城を築くや之が守備を汪古部に委ねたり、この長城は蒙古人の Ongon と呼び土  
耳古人の Bourcoura と呼べるものなり。

と云々 Djami ut-Tévarikh の記事を載せ、D'Ohsson 自らは「汪古と云へる名稱は支那の長城に起りしにせよ、將  
た支那人の陰山を稱する Ongon 山脈より出でしにせよ、此の異稱あるが爲に吾人は遂にその本來の稱呼を知ら  
ず」と註してゐる。<sup>(13)</sup> Djami ut-Tévarikh に契丹の帝王アルタン汗が Tchoutché 海の海岸より Carahouran の  
河邊まで長城を築くとあるのは誤解にして、恐らく章宗の時靜州の北に築かれた新長城の謂に相違ない。蒙古人  
が此の新長城を Ongon と呼んだからには、汪古部の稱呼を以て新長城に由來すると認定し得るのである。また  
若し陰山の別稱が Ongon であるならば、恐らく新長城 Ongon と同源にして、新長城が陰山の傍近に築かれ  
た爲に此の稱呼を得たことと思ふ。Marco Polo の紀行に Tenduc <sup>(豐州 天德軍)</sup> 地方の事情を述べて

Here also is what we call the country of Gog and Magog; they, however, call it Ung and Mungul, after  
the name of two races of People that exist in that Provinces before the migration of the Tatars. Ung  
was the title of the People of the country, and Mungul a name sometimes applied to the Tatars.

とあり、Ung, Mungul の兩種族が並存したことを傳へてゐる。<sup>(14)</sup> 箭内博士の既に指摘された如く、Ung とは On-  
ghut (汪古惕) に、Mungul は Monggol, Mongul 忙豁勒即ち蒙古<sup>(15)</sup> である。<sup>(卷二九)</sup> 天祚皇帝紀に「天祚

既得林牙耶律大石兵歸、又得陰山室韋謨葛失兵、自謂得天助、再謀出兵復收薊雲」<sup>(保大四年 秋七月條)</sup>と云ふ陰山室韋謨

葛失は、Tenduc 地方に於る Mungul の前身であるに相違なく、金史<sup>(卷二)</sup>太祖紀に「謀葛失遣其子蒞泥刮失貢方

物」<sup>(天輔六年 五月戊寅)</sup>、或は同書<sup>(卷三)</sup>太宗紀に「斡魯猷國寶、以謀葛失來附請授印授」<sup>(天輔三年 三月辛巳)</sup>とある謀葛失もまた陰山



室韋謨葛失に該當するであらう。こゝに云ふ Ung は Ongon, Ongun に由來すると解し得べく、従つて汪古部とは部族固有の稱呼ではなくして、新長城を守り邊防に當る唐古弘人即ち羌族に對して與へられた名稱である。  
 “Ung was the title of the People of the country” の字句も參照されるのである。Djami ut-Tevarikh の記事は蒙韃備錄・元史<sup>(卷一)</sup>阿刺兀思剌吉忽里傳に對應して、汪古部が羌族を以て構成されることを確實ならしめると思ふ。淨州の天山に居り、鳳翔府兵馬判官に拜せられた馬慶祥、及び雲中の塞上或は北邊に居て、群牧使と爲つた按竺邇の父・趙世延の曾祖顯公は此の唐古弘人に屬した人々であらう。鞏昌鹽川の人にして、鎮遠軍節度使・鞏昌便宜總帥に至つた汪世顯もまた嘗つて臨洮の狄道に居り後淨州の天山に遷つた馬氏と同様に、唐古弘人に關聯を求め得べく、此等邊防の官職は新長城の防禦から派生したのであると考へられる。

かくの如く汪古部の稱呼は新長城 Ongon に由來すると認められるが、王國維氏は別に党項旺家族の旺家を以て汪古の異譯と解されてゐる。<sup>(16)</sup>旺家族をば汪古部に該當せしめる根據は音の類似以外には存しないし、單に音の類似を以て數多の党項羌中より一部族を抽出すると云ふ方法は妥當であり得ない。それにしても汪古部・白達達に党項的要素の存することを留意したのは王國維氏であつて、その理由をば

蓋韃韃與黨項自陰山以西往往雜居、故互受通稱、然若據此而遽謂陰山韃韃出於黨項、則與謂其出於沙陀者、同爲無根之說也、

と説いてをられる。<sup>(17)</sup>此の見解の根柢には蒙古系統の韃韃の大きなりな西方移動が豫定されてあり、党項的要素を認めながら、なほ陰山韃韃・白達達・汪古部を以て蒙古系統と解釋するのである。然しながら蒙古系統に屬するか否かを決定する爲には、白達達の前身陰山韃韃の性質を考察することが必要である。

白達達が唐末陰山地方に據つてゐた韃靼の後であることは、既に諸名家により肯定されてゐる。此の陰山韃靼の解し方には異説が存するにしても、蒙古系統の韃靼が遷徙して陰山地方に據るに至つたとする見解を通説と認めてよいやうである。それにも拘はらずなほこゝに考察しようと云ふのは、陰山韃靼と王延徳の高昌行紀に見える九族達靼との關係に就いて疑問を持つ爲である。白鳥博士及び王國維氏は、その見解に多少の相違があるにしても、共に九族達靼を以て陰山韃靼と同じく蒙古系統の韃靼の遷徙と解してをられる。然しながら九族達靼には別個の見解が成立し得ると思ふ。

九族達靼とは都囉囉族、茅女喝子族、茅女王子開道族、臥梁剌特族、大蟲太子族、屋地因族、達于于越王子族、拽利王子族、阿墩族の謂で、宋初夏州の西方から合羅川の河邊に亘つて居處を示されてゐる。此の九族の種族を考定する上に於て注意されるのは、羌族に同様の部族名を認め得るものが存することである。資治通鑑(卷一七六)後唐明宗紀に「康」福擊走之、至青剛峽遇吐蕃野利・大蟲二族數千帳(天成四年冬十一月)とあり、舊五代史(卷四〇)後唐明宗紀にも同様のことを傳へて、「靈武康福奏、破野利・大蟲兩族三百餘帳于方渠、獲牛羊三萬(天成三年十二月丁酉)」と見え、青剛峽・方渠は共に涇原路に屬する地名であるが、別に續資治通鑑長篇(卷一)に陳執中の上言を載せて、

且羌人貪而無親、勝不相下、徒耗金帛、終誤指揮、如涇原康奴・卜嘉・勒藏・大蟲數族久居內地、常有翻覆之情、儻不剪除、恐終爲患、(康定元年三月庚申)

とあり、大蟲族は康奴・卜嘉・勒藏の三族と共に涇原地方に居り、且つ羌族に屬する。また宋史(卷四九二)吐蕃傳に「淳化五年」春、知西涼府左廂蕃落副使折迪訥龍波・振武軍都羅族大首領並來貢、

と云ふ都羅族は吐蕃即ち羌族に相違ない。此の大蟲族・都羅族は稱呼の點に於ては大蟲太子族及び都囉囉族に比定することが出来る。大蟲族は涇原路に居り、都羅族は振武軍に居て、大蟲太子族・都囉囉族の居處とは幾許かの距離があるにしても、羌族は當時河套・河西の地域に亘つて互に移動のあることを考慮するならば、別段意に介する要はないと思ふ。また九族達靺の部族名に添附されてゐる王子・太子を考へるに、金史(卷九一)移刺成傳には、  
 喬家族首領播甫與隣族木波・隴連・厖拜・丙離四族耆老大僧等立結什角爲木波四族長、號曰王子、

と見える。王子は羌族に於て部族長の稱號として用ひられたこと明白であつて、太子もまた王子と同意義に解して差支へあるまい。「此九族達靺中尤尊者」と記される達于于越王子族が、王子以外に于越と云ふ契丹の尊號を持つてゐるのは、達于族の部長が諸部族長の間で最も勢力あつたが爲に、契丹から賦與されたのであると思ふ。

前掲の史料の示す大蟲族・都羅族は稱呼の上から大蟲太子族・都囉囉族に比定し得べく、従つて九族達靺が羌族に屬することの可能性を認められるのである。こゝに考慮すべきは冊府元龜(卷九)朝貢五の條に「同光二年二月、河西郡族折文通貢駝馬」及び「四年正月、達恒都督折文通貢駝馬」とある記事である。新五代史(卷七四)達靺傳にも「同光中都督折文通數自河西來貢駝」と同様のことを傳へてゐる。之は同じく冊府元龜朝貢五の條に「明宗天成四年」九月、党項折文通進馬」とあるのに参照され、達恒都督折文通が党項なること明白である。此等の記事は後唐の同光・天成年間には河西地方に韃靺の居住してゐたことを示すと同時に、折文通を都督とする韃靺が党項即ち羌族に屬し得べきことの積極的な支柱と爲る。宋初夏州の西方から合羅川の河邊に亘り居處を示される九族達靺は五代の頃河西地方にゐた韃靺と關係あるに相違ない。従つて兩個の韃靺に關する記事は相應じて、河西韃靺即ち九族達靺が羌族に屬すると云ふ見解を確實ならしめると思ふ。たゞ達恒都督折文通は党項にして、九

族達韃中には大蟲太子族・都囉囉族の如き吐蕃の部族名が存するのは、恐らく韃韃に党項・吐蕃の兩要素を混有してゐる爲であらう。党項と吐蕃は共に羌族にして由來境域を接して居り、殊に唐末五代以來河套・河西の地域に亘つて互に混住した状態にあるべく、兩者に共通した姓氏・部族名も認められる。例へば、折氏は党項の大姓であること王國維氏によつて既に説かれてゐる。<sup>(16)</sup>續資治通鑑長篇<sup>(二)</sup>卷にも「代州刺史折仁理党項蕃部之大姓也。世居河西接隣北境」<sup>(建隆二年十二月乙未)</sup>と見えて、折氏が党項蕃部の大姓たることを明示してゐるが吐蕃にも折氏は存する。新五代史<sup>(卷七十四)</sup>吐蕃傳に「至漢隱帝時、涼州留後折連嘉施來請命」とあり、宋史<sup>(卷九十二)</sup>吐蕃傳には「申」師厚初至涼州、奏請授吐蕃首領折連支爲官、並從之」と記され、折氏は党項・吐蕃の大姓として認められるのである。また先きに引用した通鑑の「福擊走之、至青剛峽遇吐蕃野利・大蟲二族數千帳」の記事に見える吐蕃野利族は、舊唐書<sup>(卷九十八)</sup>党項傳に

党項有六府部落、曰野利越詩・野利龍兒・野利厥律兒・黃野海・野空等、居慶州者號爲東山部落、居夏州者號爲平夏部落、

とあり、新唐書<sup>(卷二二)</sup>党項傳にも「慶州有破丑氏族三、野利氏族五、把利氏族一」と記され、党項の一部族であるが吐蕃にも存したのである。別に冊府元龜<sup>(卷九十七)</sup>褒異三の條には「長興三年二月、吐蕃野利閭心等朝貢」或は又「天成三年正月戊辰、勅以吐蕃野利延孫等六人並可懷遠將軍」と見える。折氏並びに野利族・野利姓が党項・吐蕃に存するのも、部族の混住に依ると推定されるのである。かゝる例證に徴するならば、達怛都督折文通は党項にして、九族達韃中には吐蕃に屬する部族があるにしても、その間に密接な脈絡の存することを妨げないであらう。河西韃韃・九族達韃が党項或は吐蕃の何れに由來するかはなほ決定し難いけれども、五代宋初の頃には恐

らく兩要素を混有してゐたと解し得ると思ふ。

次に河西地方に於ける韃靼居住の時期を見ると、會昌一品集(卷八)「代劉沔與回鶻宰相書意」に

又踏布合祖云、紇圻斯即移就合羅川、居回鶻舊國、兼以得安西・北庭・達怛等五部落、

とあり、資治通鑑唐紀六三、會昌二年冬十月の條にも同様の記事が見えて、達怛は達靼と爲つてゐる。合羅川に就いては會昌一品集(卷六)「與黠戛斯可汗書」に「又聞、合羅川回鶻牙帳未盡毀除、想其懷土之心必有思歸之志」とある。

思ふに回鶻の牙帳は漠北を逐はれて「唐回鶻公主所居之地」(宋史卷四九 高昌傳)と云ふ合羅川に假に移つてゐて、紇圻斯は此の地に就き回鶻の舊國を領有したのである。その時安西・北庭と共に得たと云ふ達怛は河西の韃靼と解

さるべく、合羅川の近傍に居住してゐたであらう。従つて韃靼は既に唐末から河西地方に居住してゐたことゝ爲

るが、若し憶測にして許されるならば、突厥毗伽可汗碑文及び回鶻磨延啜碑文所見の九姓韃靼(20) (Toquz Tatar)

を以て河西韃靼即ち九族達靼の前身であると解し得られるかも知れない。降つて遼の統和二十三年六月己亥來聘した達旦國九部(遼史卷一 四聖宗紀)が九族達靼に相應することは、既に松井氏及び箭内博士の推定された所である。(21)

以上の所論に従ふならば、唐の中期少くとも會昌年間より以後五代遼宋に亘つて、羌族に屬する韃靼が河西地方に居住し、或は九族達靼・達旦國九部と呼ばれたことを肯定しなければならない。従て蒙古系統の韃靼が遷徙して、唐末陰山韃靼と爲り、宋初更に西に延びて九族達靼として現はれると推定する見解は自ら成立し難くなるのである。韃靼に蒙古・羌兩系統の存する所以に就ては未だ解釋を得難いけれども、或は早き時代に於て韃靼の一部が西遷したと云ふ假定が可能であるかも知れない。之は党項・吐谷渾の例證から推測されるのである。党項と吐谷渾は青海地方に隣居し、前者は羌、後者は鮮卑に屬する。その党項の諸部を擧げて舊唐書(卷九八)党項傳に

有細封氏・費聽氏・往利氏・頗超氏・野辭氏・房當氏・米禽氏・拓拔氏、而拓拔最爲強族、

とある。拓拔氏は鮮卑族にして、吐谷渾の慕容氏と共に、南北朝の頃青海地方に遷徙した部族であるに相違ない。従つて拓拔氏が党項の最強族として認められてゐるのは、此の地方に於ける部族混淆の結果、鮮卑族にして羌族に同化し擡頭した者があつたと解すべきである。また吐谷渾は青海の故地を去つて朔方河東の境に徙つて後退渾とも云はれた。舊唐書(卷一)吐谷渾傳に

及吐蕃陷我安樂州、其部衆又東徙散在朔方河東之境、今俗多謂之退渾、

とある。然るにまた羌渾とも稱せられてゐる。會昌一品集(卷八)「代劉沔與回鶻宰相頡于伽思書」に「今又深入邊境殘虐生人、以退渾爲名、侵暴未已」とあり、資治通鑑唐紀卷六三には

初可汗往來天德振武之間、剽掠羌渾、(會昌二年秋七月)

と見える。羌渾とは羌種の吐谷渾と云ふ意味に外ならぬ。且つ新唐書(卷三七)地理志延州の條には「儀鳳中吐谷渾部

落自涼州內附、置二府于金明西境、曰羌部落、曰閭門」とある。吐谷渾を以て羌族と認めてゐるのは誤解ではなくして、吐谷渾の羌化に由來すると見るべきである。なほ唐末五代に亘り活動する吐渾赫連氏及び赫連部落に由來を持つ白氏が併せ考へられる(註三八)。元來赫連氏には鮮卑族の血が混入してゐるにしても正當なる屠各匈奴(註三九)

であつて、それが吐渾赫連氏及び白氏の稱呼を以て出現するのも、部族の混淆を推定せしめるのである。

此等の事實は隣居混住が久しければ、漸時部族の持つ屬性を喪失することの例證である。若しも党項・吐谷渾に於けるが如く、韃靼にもまた遷徙及び混住の形跡があるならば、此の部族に蒙古・羌兩系統の存する所以を理解することが出来るのであるけれども、假定に過ぎないことを遺憾とする。それにしてもこゝに對象と爲つてゐる

陰山韃靼の場合に於ては、韃靼に既に兩系統の存することを前提として解釋を試みねばならないのである。

### 三

陰山韃靼<sup>(24)</sup>は新唐書<sup>(卷二)</sup>沙陀傳に廣明元年のこととして、

「李」琢進攻蔚州、「李」國昌敗與克用舉宗奔達靼、

とあるのが初見であり、年代の上からは新五代史<sup>(卷七四)</sup>達靼傳に「咸通中從朱邪赤心討龐勛」とあるを嚆矢とする。

白鳥博士は室韋を以て韃靼の一種と解し、新唐書<sup>(卷二)</sup>回鶻傳所見の「蹶跌至振武爲室韋所鈔戰死」の記事をば、

貞元元年<sup>(25)</sup>には既に室韋即ち韃靼が、陰山地方に移住してゐたことの證左とせられ、更に遡つて確證はないにして

も、室韋即ち韃靼の南下を天寶年間にあつたと考定してをられる<sup>(26)</sup>。之に對して王國維氏は韃靼が陰山の左右に徙つたのを會昌と咸通の間にありと爲し、會昌一品集<sup>(卷五)</sup>「賜回鶻嗚沒斯特勒等詔書」に

秋熱卿及部下諸官並左相阿波兀等部落黑車子達怛等平安好、

と云ふ記事に基き、達怛を三十姓韃靼と解して、此の韃靼が唐季黑車子一族と同時に并州近塞に南徙したと見、ま

た九姓韃靼は回鶻破滅後相率ひて南徙したのであらうとの見解を採つてをられる<sup>(27)</sup>。北方民族の遷徙に關する王國維

氏の見解は「黑車子室韋考」<sup>(觀堂集補卷一四)</sup>に於ても「蓋當回鶻既衰、契丹將興之際、北方民族間受一種感應、故有

移徙之事」と述べてゐる。陰山地方の室韋と韃靼は唐代に於て明白に區別されてあり、且つ遼末に於て室韋は

陰山室韋謨葛失、韃靼は白達達として再現するのであつて、室韋の移住をそのまゝに韃靼の移住とは解し難い

と思ふ。また九姓韃靼の住地は王國維氏によつて回鶻牙帳の東南數百里の地にある達旦泊に比定されてゐるけれ

ども<sup>(註二〇)</sup>、臆説の域を脱せず、従つてそれから導かるべき南徙の推定は自ら薄弱と爲つて来る。然しながら室

(參照)

韋が陰山地方に出現するのは肯定し得られる所であつて、それに關する記事を次に拾ひ、「左相阿波兀等部落黑車子達恒等平安好」の記事を解釋して見る。舊唐書<sup>(卷一三)</sup>德宗紀に「奚室韋寇振武軍」<sup>(貞元四年七月己未)</sup>と見え、同書<sup>(卷一四)</sup>憲宗紀には「奚廻紇室韋寇振武」<sup>(元和五年六月戊寅)</sup>とある。また元和郡縣志<sup>(卷四)</sup>天德軍の條には、元和九年李吉甫の上奏によつて天德軍の舊城を修築した記事に續いて、

先是緣邊居人常苦室韋党項所侵掠、投竄山谷、不知所縱、及新城施功之日、遂有三萬餘家移止城內、初議者慮城大無人以實、及是遠近奔湊、邊軍益壯、人心遂安、

とあり、此等の記載は貞元・元和の間振武軍・天德軍に對する室韋の入寇侵掠があつたことを傳へるのである。更に唐會要<sup>(卷七三)</sup>單于都護府の條には

元和元年十一月、以范希朝爲振武軍節度使、就加禮部尙書、振武有党項室韋交居、川阜凌犯、爲盜日入匿作、謂之刮城門、人情懼駭、鮮有寧日、

と見え、振武に留住して党項と交居する室韋もあつた。降つて會昌年間天德・振武の境に逃散し來つた回鶻と密接な交渉を持つ室韋があり、その居處を推定せしめる記事として、舊唐書<sup>(卷一五)</sup>廻紇傳に

那頡戰勝全占赤心下七千帳、東瞰振武大同、據室韋黑沙榆林、東南入幽州雄武軍西北界、

とある。王國維氏は黑沙榆林の地を「當在振武大同之東北幽州之西北」と解し、<sup>(29)</sup>岩佐氏は大同の正北三百數十支

里、今の黑沙土なる地に比定してをられる。<sup>(30)</sup>恐らく黑沙土方面に據る室韋は、貞元・元和の間振武・天德に入寇振

掠し、或は振武に党項と交居する室韋に、關聯を求め得るに相違ない。また新唐書<sup>(卷二二)</sup>回鶻傳には

可汗收所餘依黑車子、詔弘順清朝窮蹙、弘順厚啗黑車子、以利募殺烏介、



と見え、烏介可汗は餘衆を收めて黒車子に依り、殺されてゐる。此の黒車子が黒沙土方面の室韋に當ることは岩佐氏によつて考證されてをり、<sup>(31)</sup>會昌一品集<sup>(卷二五)</sup>「請更發兵山外邀載回鶻狀」所見の山外黒車子も同じ室韋を指してゐる。黒車子の居處に就いて會昌一品集<sup>(卷六)</sup>「與黠戛斯書」に「黒車子猶去漢界一千餘里、在沙漠中」と云ふのは、その本據地を示したのであつて、黒車子の活動がその本據地を中心として南陰山地方に延びてゐたことは疑ない所である。舊唐書<sup>(卷八下)</sup>宣宗紀に

入迴鶻冊禮使衛尉少卿王端章貶賀州司馬、副使國子禮記博士李潯爲郴州司馬、判官河南府士曹李寂永州司馬、端章等出塞、黒車子阻路而迴故也、<sup>(大中十一年十月)</sup>

とあり、黒車子は大中十一年入迴鶻冊禮使副の路を阻んでゐる。之は甘州回鶻庵特勒を冊立せんとした時のことにして、<sup>(32)</sup>黒車子が河套に出沒したことを窺ひ得るのである。また遼史<sup>(卷一)</sup>太祖紀に

討黒車子室韋、唐廬龍軍節度使劉仁恭發兵數萬、遣養子趙霸來拒、霸至武州、太祖諜知之、伏頸兵桃山下、遣室韋人牟里詐稱其酋長所遣、約霸兵會平原、既至、四面伏發擒霸殲其衆、乘勝大破室韋、

と見える。白鳥博士は此の記事によつて當時黒車子室韋が今の直隸省宣化府に當る武州に接近した塞外に據つてゐたことを推定せられた。<sup>(34)</sup>恐らく黒車子の陰山地方に於ける活動は貞元・元和の間振武・天德に入寇侵掠した當時から唐末遼初に亘つてをり、部衆の一部は振武に党項と交居し、或は黒沙土方面に占據するに至つたと解し得べく、従つて黒車子は回鶻破滅の際回鶻に隨つて南徙したとは考へ難いのである。會昌一品集<sup>(卷五)</sup>「賜回鶻囉沒斯特勒等詔書」に「秋熟卿及部下諸官並左相阿波兀等部落黒車子達怛等平安好」と云ふ記事中の左相は王國維氏の論ぜられる如く左廂にして、<sup>(34)</sup>阿波兀等部落・黒車子・達怛等が共に回鶻左廂部落であることを示してゐる。此の

記事は此等回鶻左廂部落が平穩であるとの意味で、回鶻に隨ひ南徙したことを暗示するのではないと思ふ。從つて此の記事を論據として三十姓韃靼が回鶻破滅の際黒車子一族と同時に南徙し、陰山韃靼として現はれるとは推定し難いであらう。既に考定されてゐる如く、陰山韃靼の後身たる白達達の部主阿刺兀思は汪古部に屬し、汪古部は羌族である。若しも羌系統の韃靼に東遷の妥當を認められるならば、白達達と汪古部との關係は支障なく説明し得られるのである。次に吐谷渾・党項・沙陀・契苾の如き西方諸部族の河套及び河東の北邊移動の状態を考察して、羌系統の韃靼が東遷の妥當性を持つことを歸納しやうと思ふ。

## 四

吐谷渾・党項・沙陀は、總括して云ふならば、吐蕃の壓迫によつて河套及び河東の北邊に移動し、唐の保護の下に州府を置いて羈縻されるのである。吐谷渾の故地は甘松山の陽・洮水の南に示される。龍朔三年吐蕃に敗れ、部長慕容葛鉢は公主と共に涼州に投じた。その部落を涼州の南山に徙さうとの議が起つたけれども、中絶したやうである。<sup>(35)</sup> また薛仁貴等が吐谷渾を故地に援送しようとして吐蕃に敗れた爲に、咸亨三年鄭州を経て靈州に徙り、こゝに安樂州が置かれることゝ爲る<sup>(舊唐書吐谷渾傳)</sup>。吐谷渾が河套の西邊に轉住するのは此の時に始り、諾葛鉢の子孫が部長として存したのである。然しながら部衆は悉く安樂州に徙つた譯ではなく、喁末と稱して故地に殘存した者もあるやうに思はれ、<sup>(36)</sup> 涼・甘肅・瓜・沙等の州に詣つて降る餘部もあり、それ／＼の地に就いて居らしめた<sup>(新唐書吐谷渾傳)</sup>。冊府元龜<sup>(卷九)</sup>外臣部降附の條の「開元九年、詔投來吐渾降戶委王峻」、或は「開元十年九月、吐谷渾詣沙州內屬」の如きは、此の餘部に該當することと思ふ。後安樂州は吐蕃に陥り、殘部は朔方河東の境に散徙した。舊唐書<sup>(卷一)</sup>吐谷渾傳に

及吐蕃陷我安樂州、其部衆又東徒散在朔方河東之境、

と見える。新唐書<sup>(卷四)</sup><sub>(三下)</sub>地理志党項州府の條下の註に「祿山之亂河隴陷吐蕃」と見え、安樂州の陷つたのは安祿山

の亂に河隴が吐蕃に陷没した際であらう。此の外に新唐書<sup>(卷四)</sup><sub>(三下)</sub>地理志羈糜州の條には夏州都督府に隸する吐谷

渾の州として寧朔州を擧げ、「初隸慕容都督府、代宗時來屬」と註されてゐる。寧朔州の部衆とは党項・奴剌と共に

僕固懷恩に誘はれて叛き、亂平いで後夏州の西に徙された吐谷渾である。また延州都督府に隸する州として渾州

があり、「儀鳳中自涼州內附者處於金明西境置」と註され、舊唐書<sup>(卷四)</sup><sub>(四〇)</sub>地理志隴右道の條によれば、涼州界内に

寄在する吐渾部落もなほ存したやうである。かくの如く吐谷渾は河東朔方の境、夏州、延州の地及び涼州等に散

在したけれども、部長の系統慕容氏に統率せられたのは、河東朔方の境に居る部衆である。慕容氏は貞元十四

年慕容復が長樂都督、青海國王・烏地也拔勒可汗に爲つて後間もなく卒し、封襲遂に絶えたと云ふ<sup>(舊唐書吐谷渾傳)</sup>。

党項の故地は吐谷渾の南に在り、東は松州、西は葉護<sup>(即西突厥)</sup>、南は春桑、迷桑等の羌族に接壤してゐたのである。

その河套移住の記事を求めるならば、舊唐書<sup>(卷一)</sup><sub>(九八)</sub>党項傳に

其在西北邊者、天授三年內附、凡二十萬口、分其地爲朝吳浮歸等十州、仍散居靈夏等界內、

と見え、天授三年內附し、靈州夏州等の界内に散居する部衆があつた。然しながら党項が夥しく河套に移住する

のは、河隴の地が吐蕃に陷没して以後のことである。新唐書<sup>(卷四)</sup><sub>(三下)</sub>地理志党項州府條下の註に「祿山之亂河隴陷

吐蕃、乃徙党項所存者于靈慶銀夏之境」とある。之は舊唐書<sup>(卷一)</sup><sub>(九八)</sub>党項傳に

其後吐蕃強盛、拓拔氏漸爲逼、遂請內徙、始移其部落於慶州、置靜邊等州以處之、其故地陷於吐蕃、其處者皆

爲吐蕃役屬、更號弭藥、

と云ふ記事に對應すべく、党項は弭藥と號して故地に處る者を除き、夥しく靈慶銀夏諸州の境に内徙したのである。貞觀中置かれ、初め隴右に在つた靜邊州都督府は、是に於て慶州の境に僑治するに至つたと思はれる（唐新書地理志）。肅宗上元元年涇隴の州界に在る十餘萬衆が鳳翔節度使崔光遠に降つたと云ふのも（舊唐書党項傳）、此の界限

にその部衆が存した證左にして、同じく吐蕃を避けて移住したのに相違ない。河套の地に於ける党項には時に應じて居處に變動があるにしても、慶州夏州に居て、東山部及び西夏の遠祖拓拔思恭を出した平夏部と號する種落を主體とし、その周域に擴つてゐた。會昌の初め崔彥曾・李鄴・鄭賀をして邈寧延・鹽夏長澤及び靈武麟勝の諸州に散居する党項を招定せしめたことがある（舊唐書党項傳）。會昌初年に於けるその散居區域が推定される譯であるが、

元和年間既に振武軍に室韋と交居する部衆も認められ（唐會要卷七三、單于都護府）、党項は殆ど河套の全地域に蔓延してゐたことと思ふ。宋史（卷四九一）党項傳にも

今靈夏綏麟府環慶豐州鎮戎天德振武軍並其族帳、

と見え、州名に多少の異同あるも、唐末の状態はほどその儘に宋代にも繼續したのである。更に吐蕃の衰弱後にはその種族が河套に分散した。宋史（卷四九二）吐蕃傳に

唐末爪沙之地復爲所隔、然而其國亦衰弱、種族分散、大者數千家、小者百十家、無復統一矣、自儀渭涇原環慶及鎮戎秦州既于靈夏皆有之、

とある。河套の地に於て党項・吐蕃の羌族は互に混住し、漸く異同を辨じ難い程度に至ると思はれる。

こゝに併せて河西の状態を考察するならば、宋史（卷四九二）吐蕃傳に

「後漢」乾祐初「孫」超卒、州人推其土人折通嘉施權知留後、遣使來貢、即以嘉施代超爲留後、涼州郭外數千里

尙有漢民陷沒者、餘皆吐蕃、

と見えて、涼州の郭外數千里は漢民の陷沒者を除き、餘は皆吐蕃であると云ふ。土人折逋嘉施は後周廣順三年申師厚が涼州に至り、奏請して官を授けた吐蕃首領折逋支と同様に(宋史吐蕃傳)、吐蕃の首領であらう。恐らく涼州郭外の状態は濃淡の差こそあれ河西全般に亘つて適用さるべく、吐蕃の蔓延を推定してよいと思ふ。既に安祿山の亂に於て河隴の地は吐蕃に陷沒してをり、早く龍朔年間には吐谷渾の滅亡がある。吐蕃の隆盛に伴つて、その種族

にして河隴に移住する者も多きを加へたであらうし、その衰弱後には河套と同じく河隴に分散した種落も夥しく存したことを思ふ。吐蕃の衰弱して以後回鶻・党項がその地を分侵した。舊五代史(卷一)吐蕃傳に「至五代時吐蕃已衰弱、回鶻党項諸羌夷分侵其地」とある。回鶻とは甘州回鶻を指し、党項とは河套の党項なるべきも、河西党項をも含めての謂であらう。河西党項は河隴陷沒の際吐蕃を避けて河西に逃散した部衆と推定される。冊府元龜

(卷九七七) 外臣部降附の條に

永泰元年二月、河西党項永定等一十二州部落内屬、請置公勞等一十五州、許之、

とあり、河西党項は既に唐代宗の頃から認められ、五代にも朝貢授官のことがある。例へば冊府元龜(卷九七六) 褒異三の條に「長興元年正月、勅河西党項蕃官來萬德可德化司弋、餘如故」、或は同書(卷九七三) 朝貢五の條に「長興二年正月、河西党項折七移等進馳馬」と見える如きである。河西に於ける党項・吐蕃及び前段に述べた韃靼の羌族に折氏と云ふ共通の姓氏を認め得られるのは、その間に密接な脈絡の存することを意味するのである。

沙陀は處月種にして金梁山の陽・蒲類海の東に居り、沙陀と名付くる大磧あるによつて沙陀突厥と號したと云ふ。此の部族が北庭・甘州を経て、元和三年朱邪執宜に率ひられ靈州寨に歟附するまでの経路は省略に従ふけれ

ども、吐蕃及び回鶻の壓迫に關係がある(新唐書沙陀傳)。靈州寨に款附した沙陀は節度使范希朝の奏聞によつて鹽州の陰山府に置かれるのであるが、翌年范希朝が太原に移つた爲に、之に従ひ悉く東遷することゝ爲る。新唐書（卷八）沙陀傳に

頃之「范」希朝鎮太原、因詔沙陀舉軍從之、希朝乃料其頸騎千二百、號沙陀軍置軍使、而處餘衆于定襄川、執宜乃保神武川之黃花堆、更號陰山北沙陀、

と見える。沙陀は東遷後范希朝に従屬する沙陀軍、定襄川に處る餘衆、及び朱邪執宜の下に神武川の黃花堆を保する陰山北沙陀に別れるのである。別に元和三年葛勒阿波に率ひられて振武に降つた殘部もあり(新唐書沙陀傳)、略河東の北邊、河套の東北邊に散居したと解して差支へない。

かくの如く吐谷渾・党項・沙陀は前後して河套並びに河東の北邊に移動したのであるが、同様の移動を契苾にも認め得られると思ふ。冊府元龜(卷九七七)外臣部降附の條に

憲宗元和六年正月、振武節度使李泳奏招收得黑山外契苾部落四百七十三帳、

と見え、元和の頃黑山外に契苾部落の存したことを傳へる。舊唐書（卷六十二）劉沔傳によれば、契苾は開成中吐渾・

沙陀三部落と共に、劉沔に率ひられて銀夏に至り党項の雜虜を破つてをり、石雄も沙陀李國昌三部落・契苾・拓拔の雜虜の頸騎を得て、烏介の牙に趣いたことがある(舊唐書卷一六一石雄傳)。また同書(卷六十二)盧簡求傳には「太原軍素管

退渾・契苾・沙陀三部落、或撫納不至、多爲邊患」と云ふ。資治通鑑唐紀七〇にも

「李」克用縱沙陀剽掠居民、城中大駭、「鄭」從諱求救於振武節度使契苾璋、璋引突厥・吐谷渾救之、破沙陀兩

案、(中和元年五月甲子)

とあり、振武節度使契苾璋の名を擧げてゐる。此等の記事は唐末河套の東北邊に居住した契苾が太原軍の管轄に屬し、吐谷渾・沙陀・突厥と並び活動することを示すのである。突厥は資治通鑑唐紀六一に「振武突厥百五十帳叛、剽掠營田、戊寅、節度使劉沔擊破之」(開成二年冬七月)と云ふ振武突厥に比定さるべく、東突厥の滅亡後振武に投降した部衆であると推定される。此の契苾の由來を考へるに、元來契苾とは鐵勒の一部族である。唐の初期から中期に亘つて鐵勒の諸部族は屢、河東の北邊並びに河套に内屬したに拘はらず、而もその内屬部族の中に契苾は存せずして、却つて甘涼の地に内附してゐることが認められる。契苾の故地はオルコン河域及び焉耆の西北鷹娑川の兩處である。貞觀六年契苾何力に率ひられて内附し、甘涼の地に置かれたのは、鷹娑川の契苾に比定さるべく(隋書卷八四鐵勒傳、舊唐書卷一〇九契苾何力傳)、則天武后の時廻紇・思結・渾と共に甘涼二州の地に徙つたのは、オルコン河域の契苾である(舊唐書卷一九)。(37)資治通鑑唐紀二八に

突厥寇甘涼等州、敗河西節度使楊敬述、掠契苾部落而去、(開元八年十一月辛未)

と云ふのも、甘涼の地に契苾部落の存した證左である。而してその遷住後には鷹娑川或はオルコン河域に契苾の消息を殆んど認め難いのであつて、元和以來河套の東北邊に居住する契苾は甘涼の契苾に關聯を求め得べく、その間に移動を推定されるのである。恐らく河隴陷沒の後に於ては吐蕃の壓迫を避けて河套或は河東の北邊に向ふ部族移動の風潮がありしなるべく、吐谷渾・党項・沙陀及び契苾をその例證として擧げる事が出来る。こゝに對象とする陰山韃靼の場合に於ても、河西に據る羌種の韃靼が部族移動の風潮下にあり、東遷して陰山韃靼と爲つたと云ふ見解は當然成立し得ると思ふ。陰山韃靼の後身たる白達達部の主阿剌兀思は汪古部の人にして、汪古部は羌族を以て構成さる。陰山韃靼が蒙古系統の韃靼に非ずして、羌系統の韃靼に該當さるべきこと殆ど確實であらう。

## 五

次に阿刺兀思剔吉忽里を以て「系出沙陁鴈門之後」と云ふ記事を解釋しなければならない。沙陁鴈門とは李克用の謂にして、李克用が鴈門節度使に擢せられたことに由來する稱呼である。先づ沙陀・吐谷渾・党項・契苾・韃靼の如き西方諸部族が河套並びに河東の北邊に移動して以後の消息を要約するならば、唐の邊防の任に當り、或はその叛賊の討伐に従つて、漸く擡頭の勢を得て來るのである。沙陀は朱邪執宜・朱邪赤心・朱邪赤衷を経て李克用に至り、後唐建國の基を築いたこと周知の事項である。吐谷渾は慕容氏の封襲は絶えたとにしても、赫連氏・白氏(38)の活動が見られ、党項には拓拔思恭の後裔李繼遷に至つて、河套の西沿邊一帯を根據とする西夏の建國がある。また契苾・韃靼にも多少の活動を認められる。然しながら党項以外の諸部族は契丹と五代諸國との間に介在して、急速に衰微に赴くのである。勿論五代の諸國には此等諸部族の出身者にして活動する者が多く存するけれども、部族自體とは却つて遊離してゐるやうに思ふ。沙陀は後唐滅亡後遼史(卷一)太祖紀に

親征突厥・吐谷渾・十蕃・沙陁諸部皆平之、  
(神冊元年秋七月壬申)

と見え、遼太祖の親征を蒙つてより以後、殆どその消息を辨じ難いのである。大元故大名路宣差李公神道碑銘

(秋澗先生大全集卷五)に

公諱益立山、其先係沙陁貴種、唐亡子孫散落陝隴間、遠祖曰仲者與其伯避地五台山谷、復以世故徙酒泉之沙州、遂爲湖西人、

とある。陝隴の間に散落し萎微するのが實狀であつたらうと思ふ。契苾は後唐後梁の代にやゝ活動するも後影を没し、吐谷渾は酋長白承福が郭威に殺されてより遂に微弱と爲つた(通鑑後晉紀五開運三年八月丁卯)。遼史(卷一九)聖宗紀に「以



吐渾・党項多嚙馬夏國、詔謹且防」(太平十一年十二月壬子)<sup>(39)</sup>とあり、党項と隣接してゐたらしく、元代に至つては西夏と雜居したことが傳へらる。韃靼は白達達として遼末元初に再現するのであるが、その間の状態は明かでない。此等の諸部族は代北より河曲に至り陰山を踰ゆる地域が契丹の領有と爲り、西南面招討司が設置されて後には、その統轄に服したやうである(遼史卷一太祖紀。所謂西南諸部とはかゝる諸部族の謂に外ならない。たゞ党項・吐蕃の混淆した羌族は後代にまで活動してゐる。河套の西沿邊一帯を根據とする西夏は論外であるけれども、河套の南邊・西南邊に據る羌族は西夏と宋・西夏と金との兩勢力の交錯する所にして、歸服常なく活潑な動きが認められる。河套の東北邊に居る党項は所謂西南諸部に含まれ、遼聖宗の時梅古悉部・頡勒部・匿訖唐古部・北唐古部・南唐古部・鶴刺唐古部に分たれて遼籍に編入され、西南面招討司に屬したのである。たゞ北唐古部が黃龍府都部署司に屬したのは、黃龍府の近傍に遷されその地方の邊防に従つた爲であらう(遼史卷三三・警衛志下)。金代に於て東北路部族・糺軍の中に存する唐古糺は此の北唐古部に關聯あるべく、西北西南二路之糺軍の中に擧げられる唐古糺は遼の西南面招討司に屬する唐古諸部の後身であるに相違ない(金史卷四。金章宗の時靜州北邊の新長城を防禦した唐古糺人もまた此の唐古諸部・唐古糺に比定さるべきこと論を俟たないのである。)

白達達部主阿剌兀思剔吉忽里が唐古糺人に密接な關係のあることは既に考定されてゐる。然らば「系出沙陁鴈門之後」と云ふ記事は史實ではなく、傳説として解釋されねばならないと思ふ。後唐建國の基を確立した沙陁鴈門即ち李克用の偉業は河套の東北邊・河東の北邊に隣接した諸部族の間に喧傳されたに相違ない。その系統をば沙陁鴈門に關係付けた傳説の現はれるのは、當然首肯し得られる所である。沙陁は後唐滅亡後部族としての消息を殆ど絶つたのであるけれども、傳説は河套の東北邊に長く占據し、世・部長の家柄であつた阿剌兀思剔吉忽

里の系統によつて、後代に残されたのであらう。

### 結

以上考察せし所を總括すれば、汪古部とは金章宗の時に靜州の北に築かれた新長城を防禦する唐古弘人に對して與へられた稱呼である。汪古部に屬する人々が、兵馬判官・群牧使・節度使・便宜總帥の如き邊防の官に任じてゐるのは、新長城の防禦から派生した職務に外ならぬ。白達達部主阿剌兀思剌吉忽里もまた汪古部に屬し、新長城の衝要を守つてゐる。白達達とは羌族を以て構成される河西韃靼の或る種落が、河套の東北邊に徙つた陰山韃靼の後身であるに相違ない。それが党項或は吐蕃の何れに由來するかは遽に決定し難いけれども、羌族にして唐古弘人とは同種族であり、寧ろ唐古弘人の稱呼の中に白達達をも包含してゐると推定されるのである。唐宋五代以來党項と吐蕃は河套・河西に亘つてその間に嚴密な區別を辨じ得ない程に混淆した状態にあり、恐らく白達達・唐古弘人共に党項・吐蕃の兩要素を持つてゐたであらう。何れにしても白達達をもその中に包含する所の唐古弘人が新長城の防禦に當り、汪古部と呼ばれたことは肯定され得ると思ふ。Marco Polo の紀行に Tenduc 地方の事情を述べて、Ung と Mungul の兩種族が並存したことを傳へてゐるのも、汪古部が同種族を以て構成されてゐることを證示するのである。汪古部・白達達が羌族に屬すること明白であるに拘はらず、阿剌兀思剌吉忽里が沙陀鴈門の系統に出づと云ふ傳説の存するのは、河套の東北邊・河東の北邊に於る部族隣接の結果に外ならぬ。なほ汪古部を以て土耳其系統と説く見解に於ては、阿剌兀思剌吉忽里 (Alakūš hāgi kūrī) の稱呼に土耳其語にて解き得る名詞の存することを重要な論據としてゐる。然しながら言語は部族相互の接觸を指示するには相違ないけれども、他に確實な證左のない限り、その種族を決定する積極的な論據ではあり得ない。また輟耕錄

の色目三十一種中に雍古歹の名が見えるのは、汪古部を以て羌族と認める見解を支持するにしても支障を與へないのである。

## 註

- (1) 滿鮮地理歴史研究報告第五、箭内博士「韃靼考」
- (2) 箭内博士「韃靼考」
- (3) 史學雜誌三〇ノ八、白鳥博士「室韋考」六及び東洋史潮第十二回、白鳥博士「塞外民族」韃靼の條。王國維氏觀堂集林第十四「韃靼考」
- (4) Howorth, History of the Mongols. Vol. I. P. 26
- (5) 東方學報東京第六冊、櫻井益雄氏「汪古部族考」
- (6) 新元史卷一四九月乃合傳論贊
- (7) 遼史卷三〇天祚皇帝紀耶律大石の條に「北行三日、過黑水見白達達詳穩牀古兒」とある。此の黑水が豐州地域の黑水を指すことは羽田博士の「西遼建國の始末及び其の年紀」(史林一)の二「黑水の條に論ぜられてゐる。阿剌兀思剌吉忽里の先世と推定される牀古兒は、黑水の邊に居住してをり、本文後段に引用する如く、Marco Polo の紀行に Tenduc (豐州天德軍) 地方の状態を述べて、Ung と Mungai との並存を傳へてゐる、以て阿剌兀思の居處が推察されるのである。
- (8) 王國維氏は「金界漆考」(觀堂集林卷十五)に於て蒙古遊牧記(卷五、四)子部落傳が廢淨州城を四子部落旗西北に當てるのに對してその南方に考定せんとしてゐる如くである。
- (9) 遼祖十國は閼復の駙馬高唐忠獻王碑(元文類)に始祖ト國と爲つてゐる。
- (10) 陳垣氏「元西域人華化考」卷二儒學篇二基督教世家之儒學、馬祖常の條。
- (11) 馬氏が金兵に略せられて遼東に徙つたことを記すのは、恒州刺史馬君神道碑及び馬氏世譜の「怙穆爾越歌(和祿采)生伯索麻也里東、年十四而遼亡、失父母所在、爲金兵所掠、遷之遼東、久乃放還居靜州之天山」と云ふ記事であるが、金史卷一二四馬慶祥傳には見えず、陳垣氏所引の馬祖常石田集卷一飲酒詩にも「昔我七世上、養馬洮河西、六世徙天山」とあり、同じく記してない。馬氏が遼東に遷つたと云ふ時期を神道碑は述べず、世譜によつて馬慶祥の父伯索麻也里東の時と推定されるのみである。遼東から靜州の天山に徙つたと云ふ時期を、世譜は同じく伯索麻也里東の時と傳へ、神道

碑にもまた「父把驛馬也里黜又遷靜州之天山」とあるけれども、馬祖常六世の祖（即怙穆）の時天山に徙つたと云ふ石田集の記事に合はぬ。馬姓のことに就いては前記陳垣氏の書を参照ありたし。

(12) 王國維氏「韃靼考」

(13) D'Ohsson; Histoire des Mongols. Tome I. P. 48 n. 1. 田中博士譯「ユーロン蒙古史」四九—五〇頁原註。D'Ohsson が Caranouran を黄河と解してゐるのは誤りにして、黒水に比定すべきであらう。また Djaniu-Tearikh に Karan とは北支那を指す稱呼である。桑原博士の「支那人を指すタウカス又はタムガジといふ稱呼に就いて」（東洋文明史論叢）四七二頁を見られたし。田中博士が契丹と譯されてゐるのは妥當でなく、これは金を意味すること確實である。

(14) Col H. Yule; The Book of Ser Marco Polo. Vol. I. P. 23. Tenduc 即ち豊州天德軍の位置に就いては史林十六の二、和田清氏「豊州天德軍の位置に就いて」及び東洋史研究一の一六、外山軍治氏「山西を中心とする金將宗翰の活躍」註③を参照せられたし。

(15) 箭内博士「韃靼考」

(16 17) 王國維氏「韃靼考」

(18) 宋史卷四九〇高昌傳に

雍熙元年四月、王延德等還、叙其水程來獻云、初自夏州歷玉亭鎮、次歷黃羊平、其地平而產黃羊、渡沙磧無水、行皆載水、凡二日至都囉囉族、漢使過者遺以財貨、謂之打當、次歷茅女峒子族、族臨黃河、以羊皮爲囊、吹氣貫之、浮於水、或以橐駝牽木橈而渡、次歷茅女王子開道族、行入六窠沙、沙深三尺、馬不能行、行者皆乘橐駝、不育五穀、沙中生草、名登相、收之以食、次歷樓子山 無居人、行沙磧中以日爲占、且則背日、暮則向日、日中則止、夕行望月亦如之、次歷臥梁効特族、地有都督山、唐回鶻之地、次歷大蟲太子族、族接契丹界、人衣尙錦繡、器用金銀、馬乳釀酒、飲之亦醉、次歷屋地因族、蓋達于子越王子之子、次至達于子越王子族、次歷拽利王子族、有合羅川唐回鶻公主所居之地、城基尙在、有湯泉池、次歷阿墩族、

と見え、文獻通考卷二四、四裔考車師前後王即高昌の條にも記事があり、達于子越王子族の次に「此九族達靼中尤尊者」と記し、また湯泉池の次には「傳云、契丹舊爲回鶻牧牛、回鶻徙甘州、契丹達靼各爭長攻戰」の字句がある。

(19) 王國維氏「韃靼考」

(20) 新唐書地理志所收の賈耽入四夷道里記によれば、回鶻牙帳の東南數百里の地點に達旦泊がある。王國維氏は「韃靼考」に於て「疑以韃靼人所居得名、九姓韃靼所居蓋當在此」と述べて、達旦泊の地を以て九姓韃靼の居處に擬してゐるけれ

ども、憶説の域を脱しない。九姓韃靼の稱呼は突厥碑文では毗伽可汗碑 (I E 34) に of Juz budun toquz tatar biris urup kati. ayuda iki uluz süyüs süyüdim. süsin budim. ün  
 勢物ノ民ハ九姓韃靼ト共ニ聯合シテ來タ。Aghaニ大戦ヲ戦フタ。ソノ軍ヲ破フタ。ソノ國ヲ  
 anda alym.  
 破フタ。

とロ一度見えるのみ(原文は Radloff, Die Altürkischen Inschriften der Mongolei, Neue Folge に據る)。回鶻磨延  
 碣碑文(Ramstedt, Die Inschrift des Grabsteins am Sine-usu. Journal de la Société Finno-Ougrienne. 30 所收)に  
 於ては九姓韃靼は八姓鐵勒(salkiz oruz)と並稱し、その活動が示されてゐる(O. I. 3)。此の碑文には三十姓韃靼は見えず  
 單獨に韃靼(Tatar)の稱呼が認められる。突厥碑文と回鶻磨延碣碑文との比較研究はなほ將來に残された課題であつて、  
 九姓韃靼も輕率に論斷し難いけれども、河西韃靼・九族達韃・達旦國九部に關聯を求め得られはしないかと思ふ。甘涼地  
 方とオルコン地方との間には由來密接な關係があり、新唐書卷四〇地理志甘州の條に

刪丹 中下、北渡張掖河、西北行出合黎山峽口、傍河東墻屈曲、東北行千里有舊冠軍、故同城守捉也、天寶二載爲軍、

軍東北有居延海、又北三百里有花門山堡、又東北千里至回鶻衛帳、

と記され、交通路もあつた。則天武后の時甘涼二州に内附した迴紇・渾・契苾・思結は此の通路によつて西南下したに相  
 違なく、新唐書卷二八沙陀傳に「元和三年、悉衆三萬落循烏德韃山而東」とあるのも、甘州から同じ通路に循ひ東行せん  
 としたのであらう。従つて河西韃靼がオルコン地方に現はれることは有り得ることと思ふけれども、當否は後日の考究  
 に俟たねばならぬ。

(21) 滿鮮地理歴史研究報告第一、松井等氏「契丹可敦城考」三一七頁。箭内博士「韃靼考」。

(22) 資治通鑑唐紀卷四一、大曆九年二月癸巳の條に載する郭子儀上言中の「今吐蕃兼河隴之地、雜羌渾之衆」と云ふ字句の  
 註に胡三省は

史炤曰、羌党項之屬、渾吐谷渾也

を引用してゐる。然しながら之は誤解であつて、舊唐書卷一郭子儀傳に

「僕固・懷恩盡說吐蕃・回紇・党項・羌渾・奴刺等三十萬掠涇邠瀋鳳翔入醴泉奉天、  
 とあり、党項と羌渾を區別してゐる。

(23) 史林二〇ノ三、内田吟風氏「五胡亂及び北魏に於ける匈奴」一二三頁

(24) 陰山韃靼は五代の頃生達韃と呼ばれたやうである。新五代史卷七四達韃傳に「明宗詔達韃入契丹界以振軍勢、遣宥州刺史薛敬忠、以所獲契丹團牌二百五十及弓箭數百、賜雲州生界達韃、蓋唐常役屬之」と見える。生と界は逆であらう。之は同書卷七四吐渾傳に「初唐以『白』承福之族爲熟吐渾、長興中又有生吐渾杜每兒來朝貢、每兒不知其國地部族」と云ふ熟吐渾・生吐渾と同意味の稱呼である。生熟は漢人によつて呼ばれ、白黒は契丹等によつて呼ばれたと認める白鳥博士の見解(室韋考六)に従つてよいと思ふ。

(25) 此の記事は舊唐書卷一三德宗紀、貞元四年七月己未の條に「奚室韋振武軍」とあるに對應すると思ふ。資治通鑑唐紀四九、貞元四年秋七月己未の條に

奚室韋寇振武、執宣慰中使二人、大掠人畜而去、時回紇之衆逆公主者在振武、朝臣遣七百騎與回紇數百騎追之、回紇使者爲奚室韋所殺

と見えるのも参照され、貞元元年と見るは誤解であると思はれる。

(26) 白鳥博士「室韋考」六、及び塞外民族「韃靼」の條。

(27) 王國維氏「韃靼考」

(28) 唐會要卷九六奚の條に「元和四年七月奚及室韋寇振武」とあるのは、舊唐書德宗紀の記事及び新唐書卷二一九奚傳の「貞元四年與室韋攻振武」によつて、元和四年は貞元四年の誤記と思はれる。

(29) 王國維氏「黑車子室韋考」

(40) 岩佐精一郎遺稿所收「突厥の復興に就いて」註五七

(31) 同右。たゞ黑車子は、岩佐氏の解せられる如く室韋全體の稱號ではなくして、室韋中の一部族名に相違ない。

(32) 新唐書回鶻傳に「是時(厯)特勒自稱可汗居甘州、有積西諸城、宣宗務綏柔荒遠、遣使抵靈州省其酋長、回鶻因遣人隨使來京師、帝即冊拜溫祿登里邏泊沒密施合俱祿毗伽懷建可汗」とあり、資治通鑑唐紀六五には

大中十年冬十月乙酉、上遣使詣安西鎮撫回鶻、使者至靈武、會回鶻可汗遣使入貢、十一月辛亥、冊拜爲溫祿登里邏泊沒密施合俱祿毗伽懷建可汗、以衛尉少卿王端章充使、

と記さる。此の兩個の記事を對照するならば、王端章の冊立せんとする回鶻可汗が厯特勒なること明白である。甘州と安西との關係に就いては、まだ考を得ないけれども、會昌一品集卷六「與點憂斯可汗書」に據れば「又聞、合羅川回鶻牙帳未盡毀除」とあり、會昌年間回鶻の牙帳は合羅川にあつた。しばらく厯特勒は始め漠北を追はれて合羅川に據り、後甘州に徙つて積西諸城を領したと推定するに止める。

(33) 史學雜誌三〇ノ二、白鳥博士「室草考」二、十七頁

(34) 王國維氏「黑車子室草考」

(35) 舊唐書吐谷渾傳には之に關する記事なきも、新唐書吐谷渾傳に「帝欲徙其部於涼州之南山、群臣議難之」とある。冊府元龜卷九一外臣部備禦四の條に「總章二年九月、詔吐谷渾慕容諾曷鉢部落移就涼州南近山」とあり、また此の記事の末尾に「吐谷渾竟不移而止」と見える。

(36) 資治通鑑唐紀六八、乾符二年十二月の條に「會回鶻爲吐谷渾唃末所破、逃遁不知所之」とある唃末に註して胡三省は唃末吐蕃奴部也、唐法出師必發豪室、皆以奴從、平居散處田牧、乃論恐熱亂無所歸、共相結合數千人、以唃末自號、居甘肅沙瓜渭岷廓疊宕間、其近蕃牙者最勇、而馬尤良と述ぶ。党項の故地に殘留する部衆が弭藥と號して吐蕃に役屬したと同じく、吐谷渾の殘留する部衆は吐蕃の奴部と爲り、唃末を稱したのであらう。

(37) 舊唐書卷四〇地理志姑藏の條に、吐蕃部落・閼門府・臯蘭府・廬山府・金水州・隴林州・賀蘭州を擧げ、「已上八州府並無縣、皆吐渾・契苾・思結等部、寄在涼州界内」とある。契苾何力の弟沙門は賀蘭州都督に任じて涼州に居り(通鑑唐紀十二貞觀十六年冬十月)また廻紇・渾・契苾・思結の諸酋長が王君奐に従はず諸州に流されたことがあるが、その中に賀蘭都督契苾承明の名を擧げてゐる(舊唐書卷一〇三王君奐傳)。恐らく貞觀六年内屬した契苾何力の部衆の爲に賀蘭州を設け、則天武后の時内附した契苾は之に合流したことを思ふ。

(38) 新唐書卷二一八沙陀傳に「國昌與党項戰未決、大同川吐渾赫連鐸振武盡取其賞械」とあり、大同川に據る吐渾赫連鐸の活動を傳へる。白氏とは資治通鑑後晉紀六、開運三年八月の條に見える白承福・白可久を指す。冊府元龜卷九七六外臣部褒異三の條に

「廢帝清泰三年」二月戊辰、以吐渾寧朔奉化兩府留後檢校尙書左僕射李可久超授檢校司徒、其副使檢校工部尙書赫連海龍可檢校尙書左僕射、其兩府大夫李鉄陁可檢校右僕射、可久・海龍・鉄陁皆吐渾白姓赫連部落、前朝賜姓、とあり、白姓は赫連部落と關係あることを傳へる。

(39) 元史卷一七〇袁裕傳に「又言、西夏羌渾雜居、驅良莫辨、宜驗已有從良書則爲良民」と見える。